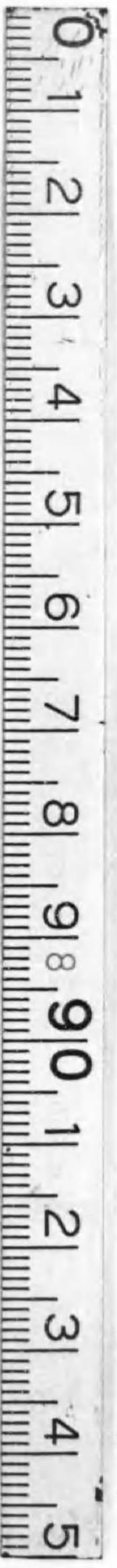


333
62



始



特 219
582



骨

杉江重英詩集

院 書 平 天



詩集骨

千九百三十年版

宮崎孝政におくる

これは自分の第二冊目の作品集である。第一冊目の「夢の中の街」(一九二六年版)以後今日まで、すでに四年を経てゐる。この詩集に収録した作品は、この四年間に書いたものゝ全部ではなく、主として最近の一年間の制作にかゝるものが多い。しかもその一部分に過ぎない。自分はこの與へられた機会に、これらの作品を、かういふ形のもさに、取りあつめておくことにしたのである。

一九三〇年夏

杉江重英

詩集・骨・目次

骨

宿

命

肋骨の下(その一).....	二〇
肋骨の下(その二).....	三三
宿.....	二八

巷	寒	鐵	肉	齒	骨	星
の			體			
			と			
			巷			
響	流			車		
.....
五	五	五		四	四	四

座	皮	或	疵	お	夜	雲	嚙
				れ	の	の	
				の			
		る					
敷	膚	男		顔	壁	上	む
.....
六	六	四	三	三	六	六	四

骨

雨に暮れる一日	屋根草	秋の蝶	雲の間	父と子	雨日異臭	抱く	舌
.....
107	105	104	101	100	98	96	94

おもふどちあなたこなたのさだめなくねたるがごとくちれ
るまつのは

(大 隈 言 道)

宿 命

骨が自分を支へてゐる

自分は立ち歩み進むであらう

骨は自分の肉體の中できしきし鳴つてゐる。

そして血が自分を温めてゐる

自分は寒さにやられてはならぬ

その血の一滴をもうしなうてはならぬ。

皮膚が自分を包んではなさない

この一箇の肉體がばらばらに解けほぐれてしまふことを

おそれてゝもゐるかのやうに

それゆゑ自分は一步も皮膚から外へは出られない。

肋骨の下

肋骨の下で音もなくうごいてゐる肺
二つの肺をまもる二十四本の骨。

おれはそれらの骨に指をおく

かなしげにそれらの骨をかぞへてゐる
肺は死したるごとく
しばしはうごかず
音もしないのだ。

肋骨の下

呼吸するたびにふくらむ肋骨。

いつかはこれらもぼろぼろになる時があらう
おれはそれまで死に堪へてゆく

生きねばならぬ
死んではならぬ
大きく呼吸をせなければならぬ。

嚙
む

自分は嚙むための歯を持つてゐる
自分は何かを嚙まねばならない
自分は嚙み、碎き、嚙み下すのだ
走る唾液が喉をうるほし舌を浸し

空虚^{ひなし}く待つてゐる胃袋へと押し流す
嚙まれ碎かれ嚙み下されゆくものとは何だらう
わが甲斐なき生命^{いのち}を繋がんがためのそのものか
否！ 嚙まねばならずして嚙んだそのものだ。

雲の上

雲の上から降りて来た天使達が自分に告げた
雲の上には何も無い
雲の上には誰もをらないと。

*

はげしく風の吹いてゐる夕方
自分は雲のながれてゐる明るい天の一方を仰ぎみながら
あの時の可愛らしい天使達の顔をおもひうかべてゐた。

夜の壁

夜の壁といふものは何でもうつす
たとへば何気なく置いた卓つくえの上の小さい物體でも
それが氣味悪い悪魔の姿となつて壁にうつつてゐる

だがそこにうつつてゐるのは
たゞ夜の黒い陰影かげだけだ
それを掻き消してしまふことは何でもない。

おれの顔

雨に洗はれたやつでの葉に
おれの顔がうつつてゐる
やつでがおれの顔を搦んでゐるのだ
おれは蒼ざめてまるで幽霊のやうに見える

だがおれはそれを信じないのだ
おれは幽霊などゝいふものを信じない
おれはおれの顔をなでゝみた
ずたずたにおれ自身の顔を引裂いた。

疵

自分の皮膚に古いひとつの疵痕がある
自分はその疵痕を身に付けてあるく
ときにはそれが消えて見えなくなつてゐることもある
そのとき自分は自分の

荒れた皮膚のおもてをさびしくうち眺め
思はず鳥肌立つてくる全身の寒さを覚えるのだ。

自分は自分の古い疵痕をいとうてゐる
たえずその醜悪なるものとたゞかうてゐる。

或る男

陰影かげの中からでも出て来た人のやうに
あの男の手足は萎へ消えかゝつてゐた
その額の上には白く埃がたまつてゐた
窪んだ眼窩の底には暗く眼玉が二つ光り

それがおもたさうに沈みこんでゐた。

ああ、あの男

あの男は何處でも陰影かげの中にかくれて棲かんでゐるのであ
らうか。

皮
膚

わたしはわたしの皮膚の上に
荒れ果てた生活の匂ひを嗅いだ
それは朽葉のやうに色艶もうせて

むなしく残る秋の景色だ。

わたしはわたしの皮膚を見てゐる
遠い野末の空の色を見てゐる。

座敷

わたしはひとり座敷に坐つてゐる
そして掛物のやうに黙つてゐる
わたしの坐つてゐるところからは
この家の門も見えてゐるのだ
わたしはぢりぢりしてゐる

わたしは何物かに飛び付きたい
わたしは今にも疊を引裂くだらう
わたしは門をみつめてゐる
いつまでたつても開かうともしない門だ。

星

雲と雲との間

無数の鳥かげが群なして消えてゆく
やがてそれらが星のやうに散るのを見た
自分は晝間の黒い星々を見た

星々のさみしいあらはな姿を見た
雲と雲との間

燦然たる光の中に於てそれを見た。

骨

わたしは自分の骨にさはってみた
一本一本の骨の所在あつかを知つた
骨はやはらかな肉の内外うちそとにあつた。

わたしはかつて見たことがない自分の骨が

何か親しい友のやうに思へ
わたしは今それらの友と
一層親密なまじはりが
こゝにはじめられるやうな気がした。

ああ、骨よ
見ることのできない君は
かくてわがよき友であれ！

齒 車

今日けふの日は明日あすの日へと廻轉していつた
たとへば黒い二つの鐵の齒車のやうに
それらは互ひに噛む、軋む、裂き合ふ
それらはもと唯二つの冷淡な鐵の輪に過ぎなかつたのだ
それら二つの鐵の輪をかさね

それら二つの鐵の輪に齒型をきざむたゞそのことだけで
二つの齒車は互ひに噛み、軋み、裂き合ひながら
はげしく廻轉しはじめたゞけなのだ
そのやうに今日の日が明日の日へと廻轉してゆくだけの
ことなのだ。

肉體と巷

つくづくさこのまをみればなくせみのなかぬもありてもの
ぞかなしき

(大 隈 言 道)

鐵

自分はレールを見てゐた

レールの上には

冬の雨が降つてゐた

その寒け立つやうな鐵の肌を見てゐると

はげしく自らを地に縛し

自らを地に釘付けする者の

峻烈な意志の方向を感じるのだ

自分は次第に沈下するものが

その鐵の下にあることを感じるのだ

レールの上には

たえず冷たい冬の雨が降り

それがやさしい音をたてゝゐるのだ

自分はその音をきゝながら

雨中をはげしくたゞよつて來る

レールの匂ひを嗅いでゐた。

寒流

おれはひとり泳いでゐた
おれの心臓は凍えさうになつた
おれは兩足で流れの底を掻いさぐり
爪先に痛く石を蹴つてゐた
おれの泳ぎ着く岸邊はどこにもないのだ

それでもおれはひとりで泳いでゐた
根かぎりの力で泳いでゐた
流れはぐんぐんとおれに迫るのだ
おれはその流れとたゞかうしてゐたのだ
それからおれはどうなつたか
氣が付いてみたときには
おれはどこかの岸邊の巖にかちり付いてゐた
そこにはおれの外には誰も人はをらなかつたのだ。

巷の響

わたしは眞晝の巷に出る

わたしは埃を浴び

それを吸うてゐるのだ

さうして何やら譯のわからぬ響の中にをる

何やら譯のわからぬ響とは何であるのか

その響は何處から起つて來るのであらうか

わたしは靜かにそれらの響に耳を傾けてゐる

頭腦の底でひとりそれを噛み分けてゐる

きらきらと秋陽に浮きたつ埃の中で

えがらつほい巷の風景のその中において。

鐵骨の下

わたしは錆臭い空気を感じた
わたしは組立てられてゐる鐵骨を見たのだ
その鐵骨の直ぐ下を歩いてゐたのだ
わたしの眼は自然と上を向く

その鐵骨の圖抜けた高さが
わたしをその高さにまで吸ひ上げた。

わたしの頭の中は
錆臭い匂ひでいっぱいになった
わたしの全身は
鐵の重さで突つ立ち動かぬのだ
わたしはひからびた一枚の舌でもつて

生臭く鐵屑を嚙んでゐたのだ
さうしてそれらを吐き出だし
はげしく唾をのみこんでゐたのだ
おお、鐵骨は白晝ひるまの幽靈のやうに
そのやうにわたしには見えて來た。

龜

龜が眠つてゐる
古ぼけてぼろぼろになつたその背せなには
岩間の清水が冷たくしづくを滴たらしてゐる
龜は眠りながらそれを感じてゐるのだ。

龜は時々かすかに手足をうごかすのだ
その微細な運動が

おれの心膽をさむくした

おれは洞窟のやうに暗い岩間の底から
迫つて来る鬼氣のやうなものを感じ

眼には見えない深い奥處おくがの彼方からは

うそさむい風が戦たたかいで来るやうに感じるのだ。

おお、龜よ

汝は此處に眠りて生きよ

此處には過去世からの風が吹く

おれも何時かは此處に来て

汝と共に眠りに就いてしまふだらう。

墓

おれは戦きながら掻き集めてゐるのだ
ばらばらに散りこぼれてゐる人骨を
おれは次第に氷のやうな寒けを肌を感じ
そのまゝ蒼白い苔の上に

がつくりと膝を突いてしまったのだ。

ああ、おれはおれ自身のばらばらになつた骨を
残らずその裏表まではつきりと眼にしてしまったのだ。
おれはおれの真近くに一つの墓を見たのだ
新しく刻まれたばかりの文字をその上に讀んだのだ。

鬼

時々來ては自分を覗いてゆく者は誰か
自分はそいつの逃足の素早いのに感心した
自分は電光のやうにそいつの跡を追ふのだが
一度だつてそいつを完全に捉へたことはない
そいつはまるで水のやうな奴だ

その素早いことは空氣以上なのだ
しかもえへらえへらそいつは嗤ふのだ
自分は幾度そいつの
無氣味な嗤ひ聲をきいたであらう
あるひはそいつこそは
人面をよそほうた鬼畜の類たぐひであつたかも知れぬ
それをおもうて自分は慄然となつた
自分は自分の窓を固くとざしてしまふことを考へた。

蝸牛に寄す

幾日も雨が降らぬので
蝸牛は貝殻の中にひつこんで動かうとはしない
乾き切つた貝殻が
ひかびか光つてゐるだけだ

誰もこの貝殻を破るな
雨が降つて来るまで
此處に寝かしておいてやれ。

肉 慾

何者が来て

この自分を救ふと言ふのか
飽くことのない肉慾だけが

このおれの凡てなんだ。

日々におれは廢頹し

貧血する

生命いのちをおとすとならば

この燃ゆる肉慾のまつ只中で。

おれはその時

合掌し、落涙し
自ら佛陀のみすがたに化身する
さうして天へ
はるかなる天へ
たなびく烟となつて昇りゆくであらう。

地獄へ

自分の見えない背中に
もうひとつの
自分の顔があるやうな気がした
おれはその醜き顔を

人々に見られることを厭うた
おれは天刑病者のやうに
人々をおそれて暮した
おれはたえず追はれてゐた
おれは狂人のやうに逃げまどつてゐた
背後に迫る熱火のやうな激しい痛苦に
おれはたゞれるやうな焦慮を感じてゐた
おれはちりちりと燃えて来る

自分の背中をおもつてゐたのだ
ああ、おれは燃えながら墜ちてゆく。

地獄へ！

街の埃

埃をくゞつて街に出た

おれは公園の小高い崖の上に立ち

そこから遠い巷の上を眺望した

おれの足下を黒い汽車が走つて通つた

おれはその煤烟すすけむりに追はれて崖を下りた

おれはまた埃の中のもの騒しい街に出たのだ

そしておれは一人の美しい女と行き過ぎた

女はさむさうな脚をしてゐた

その脚の美しさが

おれの頭にこびり付いてはなれなかつた

おれはしばらくそこに立ちどまり

さむざむと舌に埃を沁み付かせてゐた。

無
題

自は怠惰な時をたのしんでゐる
自分は雨中の蝶のやうに静かである
青々とした葉かげのかはりに
自分には雨の漏らない屋根がある

古い古い昔の人の書いた歌の本
自分の讀むものはそんなものばかりだ
自分はだんだん古くさくなる
自分はだんだん動けなくなる。

菊を作る人

菊を作る人は

自らも花の香をおもひにこめ
にごれる己が魂をあらうてゐる
花ひらくその日は遠いが
けふの日はみちかく暮れてゆくのだ

さうして明日の日もそのやうに。

菊を作る人は

自らをその葉の上にきざみ付けてゐる
しづかに育ちゆくものゝ心性に觸れてゐる
我と我がおもひの中に酔うてゐる。

古ぼけた日記帳

自分は古ぼけた一冊の日記帳を持つてゐる
けふのうちにあつたことはけふのうちに
何から何までその中に書き込んでおくために
自分には何も書くことのない日といふものは一日もない
書けば何かしら書くことがあり

それを書かずにはをられないのだ。

夜、人目のないところでそれを書く
書いては消し消してはまたその先きをつゞけてゆく
黄ばんだ日記帳の紙の上に
小さく蟻のやうに這うてゆく文字が
けふ一日の自分の姿を
まざまざとそこにうつしてくるのだ

時とすると自分は有りもしなかつたやうなことで
平氣で書いてゐることがある
さういふときの自分は
いつしか陰氣に沈んでゐるのがわかる
そして何か取返しのつかぬことを仕出來してしまつた後
のやうに
その夜はよつびて眠られぬことが多いのだ。

自分のこの一冊の日記帳は
いつの頃からか自分の机の下で古ぼけてしまひ
よれよれになつてゐる
眠るときはまた自分の冷たい枕ともなる
それはまるでこの自分をそこに見てゐるやうなものだ
その黄ばんだぼろぼろの紙と紙との間に。

家

庭

よく晴れた朝の詩

わたしは明るい部屋の中を起つて歩いた
朝の埃がわたしを包んで舞うてゐた
白い障子に我が子の小さい頭がうつり
妻は手洗鉢の水を汲みかへてゐた。

風のない夕方の詩

風のない夕方

わたしは庭に下りて

ひとりで焚火をしてゐた

わたしは白く頭に灰をかぶり

ものうくそれを拂うてゐた

わたしは妻を呼び子供を呼んだ

白い障子がしづかに開いて

そこから妻子は庭に下りて来た

彼女の背には

我が子の小さい顔があつた。

風のない夕方の我が家の庭に

何かは知らず温かく燃ゆる火をかこみ
わたしは妻子と寄りそうてゐた
赤い焔の中にあるた。

稲 妻

雨戸を開け放つたまゝで寝てしまった
夜中になつて眼がさめてみると
子供の片足が自分の胸の上に乗つてゐるのだ
自分はしづかにそれを下ろしてやつた

そしてそつと着物を着せかけてやつた
そのまゝ眼をつむつてゐると

にわかには風の音がして来た

青白い稲妻の光が

眼の底にうつつては消えてゆくのがわかつた

自分は起つて雨戸をしめて戻つた

ふたゝび床の上に横になつてゐると

遠くの方で雷の音がきこえはじめて来た

そしてそれがだんだんこつちへやつて来るのだ
大きく蚊帳が揺れはじめると
ぼつりぼつり雨の音が枕にひゞいて来た。

舌

赤子は鯉のやうに口を開いて眠つてゐる
その小さい舌がのぞいてゐる
乳にそまつて白く時々うごいてゐる舌

その小さい舌に意志はないのか
その小さい舌に生活はないのか
その小さい舌は白い障子のやうにうごいてゐる。

抱
く

赤子は眼ざめ

聲たてゝわらふのだ

ぐらつく顎の骨をさゝへてゐる自分の手の上に

赤子は白い乳を吐く

その乳の匂ひが頭に沁みる

夕暮のさむい家の中を歩きながら

自分は片手で障子をしめてまはる。

雨日異臭

いちにち雨が降りそのまゝ夕方になつた
婦をんなは子供の襁褓ひっさきをあぶり火をかへてゐた
わたしはいちにも何も書けず坐つてゐた
暗い襖がいつそう暗く陰氣に見えた
わたしは嗅ぎなれた異臭を嗅ぎ呆然としてゐた

手や足や全身の皮膚に沁みてはなれぬもの
我が家はたゞならぬ異臭に満ちみちてゐた
さうしてそのまゝ夕方になり夜になつた
わたしらは各自おのづからに疲れ身を横へてゐた
ものうい晚餐がやがてそこにはじまつてゐた。

父と子

自分はいよいよ父親らしくなつた
しかし自分は老いなければならう
我が子が自分を老いさせなければならう。

我が子は鰯のやうにびちびちと跳ねかへり
尾鰭のやうな冷たいその手で
自分の顔をたたくのだ。

雲の間

葉の落ちつくした梢の上に何があるのか
何もないのだ
空には夕方の雲がうかんでゐる
その高い高い雲の合間から
自分を呼んでゐる聲がする

わたしは立ちどまり
その聲をきいてゐるのだ
それは赤子の泣く聲だ
その聲は遠い我が家の方からひゞいて来る。

秋の蝶

枯葉のうへを雨がたゞき
枯葉は濡れた地面にへばり付いてゐる
わたしはうそ寒い肌をその葉の下に感じてゐた
瀕死の蝶の羽の色をそこにおもひうかべてゐた。

屋根草

我が家の屋根の上に
青々と一本の草が生えてゐるのを眼にした
焼けた瓦と瓦の間の狭い場所に
草は何を吸うて生きてゐるのであらう

夜、わたしは寢床に横りながら
何か頭上に重たいものを感じて
何時までも寢付かれない氣持だった。

雨に暮れる一日

いちにちわたしは
机の下にうづくまつてゐた
さむく手足をちぢめて
わたしは蝦魚のやうな姿で寢ころんでゐた。

いちにちわたしは雨の音をきいてゐた
それが何時までも

耳に付いてはなれないのだ
わたしの考へはばらばらに散つてゆくばかりだつた。

そして何時の間にか夕方になつてしまつてゐた

わたしはすっかり疲れてゐた

まるで一日中どこかを駆けずりまはつてゝも來たものゝ

やうに。

わたしは手足を伸ばしてやつと起き上つた
ペンを投げると

それが机の上に突つ立つた
寝てゐる子供を抱き上げて

子供と遊んでゐると夜になつた。

詩集・骨

昭和五年九月十日印刷
昭和五年九月十日發行

(定價 金壹圓)



著作者 杉江重英

東京市神田區表猿樂町二十五番地

發行者 中村俊孝

東京市芝區片門前一丁目四番地

印刷所 加利屋印刷所

東京市神田區表猿樂町二十五番地

發行所 天平書院

(振替東京五二一〇四番)

終

